

にあたっての「職業に貴賤はないが、然し唯、医業は尊い人命をあずかる崇高な職業であることを忘れるな」の彼の一言が脳底深く刻まれた（渭東薫、『堺市医師会報』昭和六十年十月）と記していることからもうかがい知られる。

（大阪府豊中市）

トウキユデイデス『戦史』における ギリシア医学の影響

今井正浩

古代ギリシアの歴史著述家であるトゥキユデイデス（前四六〇～三九九年頃）の『戦史』第二巻四七節以下には、ペロポネソス戦争（前四三一～四〇四年）開戦二年目にアテナイをおそい、その後の戦局を大きく左右した「疫病」に関する詳細な記事がみえる。病状の経過をめぐる記述が当時の医学用語（ほとんどがヒポクラテス文献中に見出される）を正確に用いてなされている点からも、史家が医学について深い知識をもっていたことがよく指摘されてきている。本発表では、これよりさらに広い観点に立って、史家の歴史認識それ自体にヒポクラテス医学派が少なからぬ影響を与えたとする Weidauer の研究などをもとに、史家と当時の医学思想とのつながりについて考えてみたい。

一 ヒポクラテス文獻との関連

Weidauerの研究の重点は、『戦史』の中で史家の歴史観を端的に表している重要なキー・ワードをめぐる綿密な分析にある。彼はこの分析をとおして、これらの用語の意味内容が『ヒポクラテス医学著述』中の主要文獻、一般にヒポクラテスの真作と伝えられる『エピデミアイ』一・三卷、『予後』などにみえるものと密接に関連することを明らかにしようとしている。さらに、(a)「疫病」についての記述の冒頭部にみえる史家の方法的態度(その原因をめぐって憶測を交えた探究は控え、判断の基準となる病状の経過についてののみ詳しく述べるという姿勢)は、ヒポクラテス医学派の「予後学」的視点に由来するとし、また(b)『戦史』第六卷一四節で史家がある政治家の口を介して述べている政治の基本原則(為政者は国家にとっての医師として、益をなし、*ἀωφελεῖν*、自らすすんで害をなさない、*ἄντὶ βλάβου*)と、『エピデミアイ』一巻一節の「助ける、または害を与えない」という医療の基本姿勢との間に一致点を認めようとする。しかも、このような両者のつながりを説明づけるのに、『エピデミアイ』一・三卷が成立

した前四一〇年頃にギリシア北部地域で医療活動を行っていたヒポクラテスと史家との間には、何らかの個人的交流があったのではないかと想定する。この主張それ自体は推測の域を出ないものだが、Weidauerの研究の注目すべき点は、史家の歴史記述の方法とヒポクラテス医学派の方法との間にはっきりとした一致点を見出したことにある。

二 『エピデミアイ』における医師の方法的視点と『戦史』における歴史記述の方法

ヒポクラテス医学派の方法的視点を、彼らの遺した「疾病記述」の具体的な文脈のなかに探ってみよう。『エピデミアイ』(諸地域における医療活動の記録)中には、特定の個人についての臨床記録のほかに、「カタスタンス」と呼ばれる総合記述が含まれている。これは、ある特定の地域で一定期間内に発生したさまざまな病気の症状とその経過、罹病状況などを、記述者である医師の統一的視点のもとに一定の文書の形式にまとめたものである。この種の文書の記述形式と史家の「疫病記述」の内容とが非常によく似ているということが、何度も強調されてきた。が、こうした類似はただ表面的なものではなく、さらに共通の方法

的視點に根ざしたものとみることもできる。「疫病記述」の冒頭部にみえる史家の方法的態度は、この記述が単なる雑録ではなく、一定の目的の考慮にもとづいて作成されたものであることを明らかにしている。史家の意図は、そうした考慮のもとに、主要な症状の経過の記述をとおして「疫病」にひとつの統一的な像^{イメージ}を与えることにあった。また、これは『戦史』全体をつらぬく史家の視点ともいえる。戦争という人間社会の病氣について、その「症状」ともいえる個々の事象相互の関連を史家の統一的視点のもとに克明に跡づけ記述していくという姿勢には、『エピデミアイ』における医師の方法的視点に明らかに通じるものがある。

三 史家の歴史認識と医学との関わり

ヒポクラテス医学派から史家への影響ということを想定するならば、実際にそれがどのような形で起ったかという問題が出てくる。Weidauer のみるように、ヒポクラテスと史家との間に個人的交流があったかどうかはともかく、史家と当時の医学思想との関わりは、彼がペロポネソス戦争開戦と同時に記述をはじめより以前、史家自身の歴史観

の形成期にまでさかのぼると思われる。その際、史家が『エピデミアイ』一・三巻、『子後』など特定の医書に触れたかははっきりしないが、この種の専門的な文献の精説をとおして、そこから読みとれる医学の方法的側面を積極的に評価し、自らの歴史認識の方法へと取り入れたとみることは十分可能だろう。言いかえれば、当時のギリシア医学は、史家の高度な歴史観の形成に影響を与えるほど「学」としてすでに完成していたということになる。

(東京大学人文科学研究所西洋古典学研究室)